

Q & A

Q1 子宮頸がんの自覚症状はありますか？

A1 自覚症状はほとんどありません。ただし、不正出血（生理以外の出血）などで婦人科を受診して、がんが見つかる場合があります。

Q2 検診の対象者は？

A2 20歳以上で、一度でも性交渉経験のある女性が対象です。

Q3 どのくらいの間隔で検診を受ければいいのか？

A3 2年に一度で十分です。毎年受ける人と隔年で受ける人の予防効果は変わらないからです。

Q4 検診の費用は、いくらぐらいかかるの？

A4 自治体や職場の検診、人間ドックなどによって、自己負担は異なります。自治体の検診は、無料～2000円程度です。

Q5 検診はどこで受けられますか？

A5 自治体から委託を受けた医療機関などです。詳しくは、お住まいの市区町村のがん検診担当窓口へお問い合わせください。市区町村の連絡先は、<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/link.html> で検索できます。

Q6 検診で異常ありと言われました。とても不安です。

A6 がんが「ない」のに「あるかもしれない」と判断される可能性もあります。確実にがんが「ない」と判断するためには精密検査が必要です。

Q7 検診で100%、がんが見つかるのですか？

A7 検査の精度は100%ではなく、がんが見逃される場合もあります。定期的に検診を受けることで、見逃しをできるだけ減らすことが可能です。検診では前がん病変や初期のがんも見つかりますが、この中には病変が進行せず死亡に至らないものも含まれています。こうした病変を見つけてしまうことで、結果的に必要以上の検査や治療が行われることもありえます。

Q8 HPV(ヒトパピローマウイルス)予防ワクチンについて教えてください。

A8 HPVは100種類以上もあり、その中に子宮頸がんの原因となるものが十数種類あります。子宮頸がんの原因の多くを占める2種類のHPVの感染を予防するワクチンが、2009年12月から使用できるようになりました。ワクチンは、子宮頸がんの原因となるすべてのHPV感染を予防するものではありません。最も予防効果が望めるのは性交開始前の女児です。ワクチンを打ってからの有効期間や何歳まで接種して効果があるかはまだわかりません。大事なことは、ワクチンを接種しても検診は欠かせないということです。

このリーフレットは、厚生労働省「がん検診の評価とあり方に関する研究」班濱島小班と8人の一般市民が共同で作成しました。内容は、厚生労働省研究班による「有効性評価に基づく子宮頸がん検診ガイドライン」に基づいています。

科学的根拠に基づくがん検診推進のページ

<http://canscreen.ncc.go.jp/>
からもダウンロードできます。

子宮頸がんに関する情報

国立がんセンター

がん対策情報センター（がん情報サービス）

<http://ganjoho.jp/public/index.html>

子宮頸がん

他人事と思わないで！

検診を受けていれば安心です



その1人が、あなたかもしれません…

子宮頸がんは、30代後半～40代でがんになる可能性が最も高く、50代以上の方も発症のリスクがあります。

日本では年間約3500人、1日当たり約10人が、子宮頸がんで亡くなっています。

子宮頸がんはウイルス感染が原因です

子宮頸がんの原因は、主に性交渉によるHPV(ヒトパピローマウイルス)感染です。HPVはごくありふれたウイルスで、多くの女性が一生に一度は感染するといわれます。感染しても、必ずしもがんになるわけではありません。

男性も感染しますが、がんを発症することはごくまれです。

感染から子宮頸がんへの移行



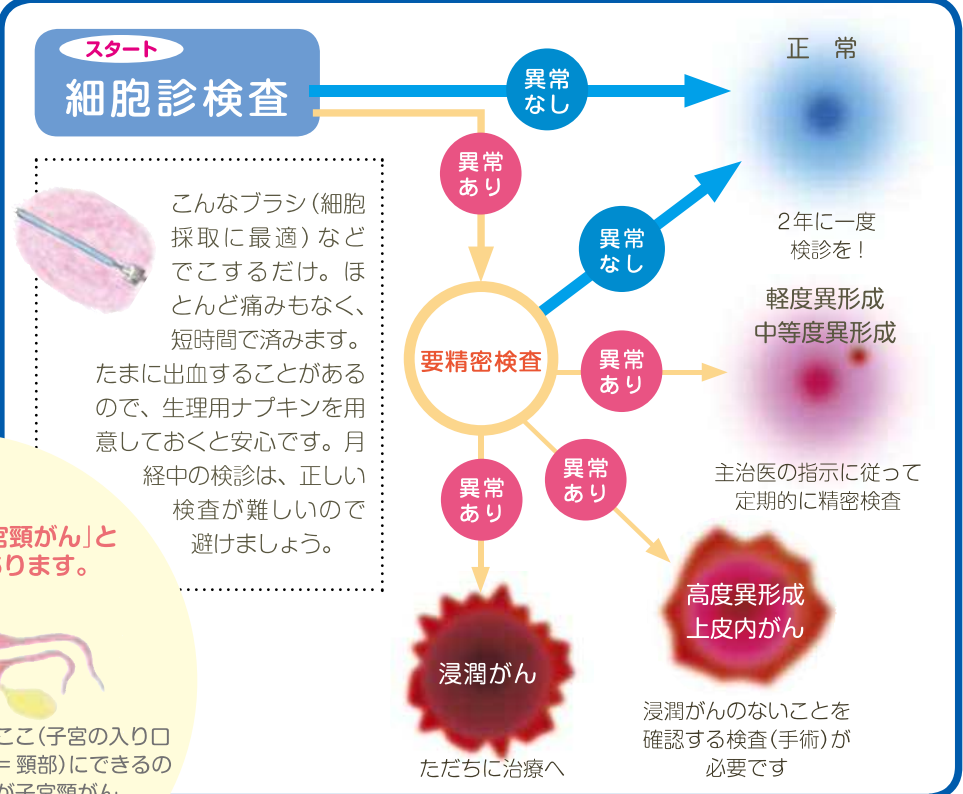
この段階で見つけられます

感染からがん化するまで数年から数十年

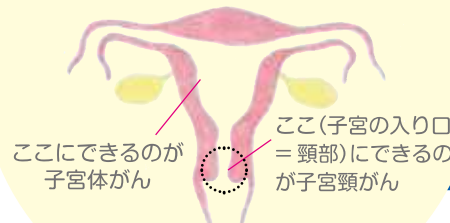
HPV感染した一部が前がん病変に移行します。前がん病変には、軽度異形成、中等度異形成、高度異形成の3段階があり、ゆっくりと進行し、さらにそのごく一部が浸潤がんになります。前がん病変は、元の正常な状態に戻っていく可能性もありますが、医師の指示に従って精密検査を受け続けることが重要です。

子宮頸がん検診の流れ

※不正出血などの自覚症状がある人は、ただちに婦人科を受診しましょう。



子宮がんには、「子宮頸がん」と「子宮体がん」があります。



精密検査が必要な場合は、不安がらずに必ず受けましょう!

コルポスコープ(子宮頸部を拡大して観察する医療機器)のある医療機関で検査を受けます。

予防のために私たちにできること

- 検診は、あなたがあなたの生命と子宮を守る確かな選択肢です。子宮頸がんは、がんの一手前(前がん病変)で見つけられます。進行も緩やかです。定期的に検診を受けていれば、浸潤がんになる前の段階で見えることが多く、経過観察や負担の少ない治療で済むことも多いのです。
- 高度異形成や、上皮内がんと呼ばれる初期がんの段階で見えれば、子宮頸部の一部を切除するだけで子宮を残すことが可能で、妊娠・出産もできます。

定期的に検診を受けましょう。